平成20年12月1日
(2008)
第91号
毎月発行
編　集
公民館だより編集室
発　行
西東京市公民館

西東京市 公民館だより

田無公民館
南町5-6-11
TEL 461-1170

保谷公民館
柳沢1-15-1
TEL 464-8211

芝久保公民館
芝久保町5-4-48
TEL 461-9825

ひばりが丘公民館
ひばりが丘2-3-4
TEL 424-3011

谷戸公民館
谷戸町1-17-2
TEL 421-3855

保谷駅前公民館
東町3-14-30
TEL 421-1125

公民館事業から見えた「地域防災」

【公民館・危機管理室・西東京ボランティア・市民活動センター・エフエム西東京・都営柳沢一丁目アパート自治会の共同事業】

各地で起こる自然災害のニュースで「住民の皆さんは『公民館』に避難しました」という情報をよく耳にします。ということで、「避難所に泊まってみよう」を合言葉に、柳沢地域の親子や都営住宅自治会の方々が保谷公民館に集まりました。

やぎさわ探検隊「まち歩き」

普段何気なく通り過ぎてしまう西武柳沢駅前にも、地震の後に私たちを助けてくれる店や物がいっぱい見つかりました。

例えば、身近な商店街のお米屋さんは、いざというときにはお米を供出してくれること、ご存知ですか?コンビニだって、一時的な食料備蓄基地です。まして普段から人間関係の濃い商店街の皆さんは、きっと町の人々のために協力的なはずです。

町のあちこちに「消火器」「消火栓」があります。初期消火で防ごう大火災。近所の消火器を確認しなくてはと感じました。

逆に、怖いなと思ったのは「電線が密集する電柱の近くや倒れそうな万年塀」などです。通勤・通学路にこんな所があったら、できるだけ避けましょう。

発見!保谷公民館のすぐ近所に、震災井戸が2本もありました。夏冷たく、冬暖かいお水が、こんこんと湧いていました。

最後に、危機管理室の職員から、災害に必要な備蓄等の話を聞きました。

「空き缶で炊飯」

「炊飯器がなくても、ご飯を炊くことできますか?」という意地悪な質問でスタートです。500mlのアルミ缶で一合のご飯が炊けました。焦げたり、芯があったりしましたが、子供たちは、自炊したご飯に感激です。もちろん、自治会の「おばちゃんたち」の『炊き出し』もあり、五目御飯と味噌汁にも大感激。『炊き出し』も今年で3年目、ますます手際が良くなりご近所の底力、が強くなった瞬間でした【継続は力なり…】。

「大震災被災者から話を聞く」

富士町在住の渡辺さんから、阪神淡路大震災のとき、4千人もの被災者と暮らした避難所の生活について伺いました。

「飲み物・食べ物」は、一定の時間が経過すると必ず手元に届くそうです。ところが、トイレはライフラインが復旧するまでは「流せなくなり」避難所でも本当に困ったそうです。それと、意外な必需品として「下着(パンツとシャツ)」と「避難用の靴」を非常持出しに用意しておくと良いそうです。

防災マップを作成している参加者

凄惨なお話の中、唯一心が明るくなったのは「あんな事態に陥っても、必ず皆さんが寄り添って、助け合うようになる」「自然に困った人を手助けするようになる」のだそうです。ですから、『まずは、絶対に命を落とさないようにしなければならないのです』これが渡辺さんからの貴重な伝言でした。

情報の大切さ!

私たちの町には、コミュニティーFM局があります。エフエム西東京の大塚ディレクターから「在京ラジオ局のような広域情報は提供できないけれど、私たちは、本日の○×銭湯は午前が男湯、午後が女湯です。というような、西東京に特化した生活情報を、足を使って流します」との説明に、ラジオの必要性を改めて認識しました。さらに、地震が発生すると自動でスイッチが入る「震災ラジオ」の説明も受けました。

「避難所に泊まろう」

今回のメインイベント。布団も枕もない、段ボールを敷いて雑魚寝(ざこね)。果たして眠れたのでしょうか?夜中に「眠れないよ〜」って、事務室に来たのは誰だ…?

翌朝、非常食での朝食。パンもスープも美味しかったのですが、缶切りで缶詰を開けるのは初めての小学生がいました。いざという時、あなたのお子さん、お孫さん大丈夫ですか?

たった二日間の体験でしたが、得たものは多かったのでは…。次に地震が起こるのは「5分後か、5ヵ月後か、5年後か」誰もわかりませんが、そのための準備は、し過ぎということはありません。ご家族でも、職場でも、いざというときの準備について話し合ってください。

サークル訪問

書道サークル 爽書(そうしょ)会(かい)

毎年、谷戸まつりには大きな看板が立てられ、達者な筆文字の案内板などが目につきます。これは谷戸公民館で「書」を学んでいる爽書会のグループによって書かれたものです。また、谷戸まつりの展示部門でも、爽書会のみなさんの作品が展示されています。

爽書会は平成元年に書の好きな方によって結成されたもので、平成12年に前任者のあとを継いで東(ひがし)先生に変わられ、現在に至っています。爽書会というサークル名は東先生の雅号の一字を取って名づけたそうです。

会員は15人で、楽しく月2回の活動をしています。取材に伺った日も、皆さん真剣に筆を執っていました。

しかし毛筆ばかりではありません。お友達など、送り先の方に気持ちよく読んでもらうためにペン字などの手紙文の練習も行っています。

昨年5月に入会した会員は、「そのときの気分によって出来、不出来がありますね。だから気が落ち着かないときに筆を持つことによって落ち着きを取り戻すこともあります」と。

「書」は自分を表現する

「書くのが大好きなのに加えて、おしゃべりのできる友達もでき、また筆を持つと姿勢がよくなるので、楽しみながら通い続けています」と、向台町から通っている会員は話します。

代表の鷲山さんは、「日常生活に役立つ書を学べるのがいいですね。東先生は、とても熱心な先生で、書を幅広くくわしく教えてくださいます」。

指導にあたっている東先生は「書は非常に地味ですけれど、生涯にわたって自分のために続けられるもので、ある意味では自分との闘いであり、また添削したものを身体を通して表現できるものです。ここにいる皆さんは活気に満ちています」と話してくれました。